

【創作】

## 家族の短篇小説集 ②

増田 辰良 経済学部教授

創作

## 家族の短篇小説集 ②

増田辰良

## 目次

5. 年末年始の三日間
6. 遺産額
7. プラセボ社

## 5. 年末年始の三日間

新しいことをはじめろ、リズムを変えろ、と女房を諭す作家の心境とは。

……チヨークを手にしたまま、黒板の前に立っている。背後から、潤三！ 早く解けよ、と嘲笑を含んだクラスメイトの声がする。続いて、潤三君、無理なら解かなくていいよ、と数学の女教師の声もした。場所は高等学校の教室で大学入試の過去問を解かされていた。うん。このままでは……。

潤三はガタガタという音に夢から目を覚ました。それは買物客が押すカートの車輪が発する音であった。どうやら散歩の途中で立ち寄ったスーパーの出入口にあるベンチで居眠りをしてしまったようだ。夢の中身は仕事がいまいけないときに必ず再生される辛い情景であっ

た。

その日の夜明けまでに、潤三はある雑誌の新年号に載せるミステリー小説を二本、書き上げた。しかし、内容についてはいずれも満足していなかった。ミステリーなので、仕方のないことであろうが、編集者からはモチーフ(訴えたいこと)が弱いと揶揄されそうに思えた。

この弱点を克服するには、思考のリズムを一度、壊してみることであり、何か、訴えたいことが明確なテーマを選ぶことであった。その文体も、けっして表現しすぎず、それでいて完全に表現することであった。こんなことを逡巡しながらの散歩は足取りも重く、帰宅時刻を遅らせた。

注連飾りを掛けてある玄関ドアを開けると、女房がきよろきよろと何かを探していた。

潤三は靴を脱ぎながらぶっきらぼうな声をかけた。

「おい。何を探しているんだ？」

「いえ。あの」

「何だ。何を探しているんだよ」

「いえ、見つけれないので、捨てたかな、と思って」

キーワード…家族、年末年始、孫の手、遺産額、プラセボ

「だから。何を？」

「いえ」

リビングへ入り、また訊いた。

「大事なもののか？」

女房はようやくバツが悪そうに答えた。

「おとうさんのお念珠ねんじゆの紐ひもが切れて、こぼれた珠たまを紐に通したのですけど、まだ途中で、それをどこへ置いたか忘れてしまつて。もしかしたらゴミ箱に捨てたかなつて思つて」

「葬式でもあるのか？」

「いいえ」

葬式もないのに、なぜ数珠じゆずを手にするのだ、と訝いぶかる思いで、また確認をした。

「義母おばあちゃんの三回忌は来年の七月だろ？ カレンダーにも書き込んである」

「はい。おとうさんが散歩に出た後、姉から日にちが確定したからつて、メールが届いたのよ」

「七月だろ？」

「はい。それでえ、おとうさんの喪服を確認してみたら、ポケットにお念珠袋が入っていたの」

「去年、俺の母親の七回忌で着て、クリーニングに出してから、失くすといけないと思い、数珠はポケットへ入れておいたんだ」

「それで袋から出したとき、お念珠を落としてしまつて、紐が切れて散らばつたのよ」

「なぜ、出したんだ。それにしても、半年以上先の七月に使う喪服や数珠の心配を、なぜ今しなきゃならんだ。今、年末だぞ」

苛いらついた声で、こう訊いても女房は答えなかった。

夕食が終わっても、書斎に入る気分になれず、新聞を広げていると、

女房はまたウロウロし始めた。

「何をしているんだ？」

「お念珠をどこに置いたか……」

「散らばつた数珠なんて、素人が直せるものじゃない。一つ一つの珠の並びに仏教上の意味があるんだろうから。壊れたものは捨てて、新しいものを買えばいいじゃないか。放蕩息子ほうとうむすこ、家に返らず、つて言うだろ。いや、覆水盆ふくすいぼんに返らず、かあ」

冗談を交えて、そう論しても女房は寢室の箆筒たんすを探ったり、二階のクロゼットへ探しに行ったり、戻つて来て、食器棚、書類入れの引き出し、最後には台所の生ゴミの袋まで覗き込んでいた。

その背中へ声をかけた。

「お前なあ、自分が置いた所を忘れてしまったのか。しっかりしろよ。そのうち、どこからひょっこり出てくるさ。出てきても直さないほうがいい。数珠なんて家電量販店の家具コーナーでも買える時代だから。心配するな」

それでも女房は同じ場所を繰り返し探していた。潤三はたまらず荒っぽい声をかけた。

「毎日、買物に出る以外は室内にいて、本ばかり読んでいるようだけど、脳ミソが弱つてきたんじゃないのか？ スーパーへの行き帰りのコースを変えてみる。普段とは違ったことに遭遇して、脳ミソが活性化するから。本だって、読むだけじゃあ、駄目だ。文字を書くのが一番いいんだ。鉛筆を使って感想文を二百字程度にまとめるとかして指先を動かさないと、脳ミソは働かないつて。年末くれの三十日に、よりによつて数珠の心配なんかしないでくれ」

潤三からすれば、きつい言葉を聞かせたつもりであるが、女房は不安げな表情をしたまま、なおも探していた。潤三はその動作にイラッ

きを覚え、掛け時計に目をやってから、

「おい。もう風呂の湯を出せ」

と言いつつ放った。

女房は探すのを諦め、風呂場へ向った。

翌日、潤三は朝から原稿の推敲をしたが、納得できないまま午後三時には仕事を切り上げ、明るいうちにひと風呂浴びた。それから飲んだ二合の酒に酔っていた。時刻は年越し蕎麦を食べるにはまだ早く、台所に立つ女房へ、胃袋の隙間を埋めようとお茶漬を要求した。テーブルに運ばれてきたご飯茶碗を見て、不満げに強い口調で言った。

「おい。今年、最後の文句を言ってもいいか？」

「何ですか？」

「俺は梅干を乗せてくれ、と頼んだのだぞ」

女房は一瞬、眉間に皺を寄せたが、冷蔵庫から梅干の入ったタッパを持ってきた。

潤三はそのうちの一個を箸で取り、お茶漬けの上に乗せてから、小言を聞かせた。

「お前なあ、三十秒前の会話を忘れてしまっている。この一年、ずいぶん物忘れがひどくなったな。俺より四つ若いのだから、しっかりしろよ。子供たちが東京の大学へ進学して、この家を出てから、急に物忘れがはじまったぞ。まだ、俺たちの子育ては終わってないからな。ところで昨日の数珠はどうなった？ 見つけたのか？」

「数珠ですかあ？」

「数珠ですかあ？ って、お前、紐が切れて、それを直そうとして、途中で止めて、どこへ置いたか忘れてしまったって、昨日、探していた

じゃないか？」

こう問いかけても女房はすっかり忘れて去っていた。

「私のお念珠はご利益があるように大切な物と一緒に置いてあるわ」

「ええっ？ ご利益があるのか？ 違う。俺の数珠の紐が切れたって、お前は言ってたぞ。もう忘れたのか？」

ここまで話すと女房は思い出したようだ。

「あゝあ。見つけていません。壊れたので新しいものを買うわ。おとうさんのものだから……」

「いいよ。俺が家電量販店で買ってくる。三回忌に間に合えばいいんだし」

「仏具店でなきやあ」

「仏具店だと高価ぞ」

「それに宗派があるから」

「俺の実家は浄土真宗だ。西本願寺と覚えておけばいい」

女房は忘れるかもしれないと言って、メモ用紙に西本願寺と書き込んだ。

「メモを取っても、そのメモをどこに置いたか忘れるぞ。西本願寺と覚えておけよ」

「おとうさんに、もしものことがあった場合、忘れてしまっていたら、親戚に叱られるのは嫌だから」

「俺は信心深くないから、お経はお前の方の曹洞宗でもかまわん。葬式はお前と子供たちのみで簡単に済ませてくれればいい」

「後から、お友達や仕事仲間が自宅に弔問に来ないかしら？」

「そんなときは事前に電話連絡があるはずだから、主人の遺言でお断りしています、って断わればいいんだ」と言い、潤三は「ちえ」と舌打ちした。

「……」

反論してこない女房へ止めを刺すよう潤三は吐き捨てるようにこう付け加えた。

「大晦日にこんなことを話題にするかあ？ いいかげんにしろ」

テレビからは『年忘れ日本の歌』が流れていた。

「歳、取ったなあ。まだ生きていたんだ」

潤三は思わず声を出した。

画面では梶光夫が、

♪流れる雲よ 城山に のぼれば見える 君の家…♪

と、『青春の城下町』を歌いはじめた。

タイトルの横には昭和三十九年と書かれていた。

「俺が九歳のときの歌かあ」と声を漏らすと、

「私は五歳だったから、もう少し歳がいつてから、これを聴いた覚えがあるわ」

と、女房は返してきた。

次に新川二郎が当時の声質のまま、

♪雨の外苑 夜霧の日比谷…♪

と、歌いあげた。『東京の灯よ いつまでも』である。

「昔は幼い子供も大人たちと一緒にこんな歌番組を観てましたよねえ」と言う女房の声はどこか弾んでいた。

「そうだな。三十秒前のことは忘れても、五十数年前のことはよく覚えてるよなあ」

潤三はそう皮肉を聞かせてから、さらに続けた。

「今年も、あと数時間で終る。昔を思い出すのは一時にして、明日からは気持ちを变えよう」

女房は懐メロに心を奪われているのであろう、潤三の言葉には応え

(四)

ず、画面に目をやったまま、ぼつりと言った。

「あのころはテレビを観ることくらいが娯楽だったから」

明けて新年、潤三が起床すると、女房は台所でテーブルへ並べるおせち料理の準備をしていた。その背中へ声をかけた。

「新年、おめでとう」

「おめでとうございます」女房は顔をこちらに向けて答えた。

そして、すぐに訊いてきた。

「神棚に供えるお雑煮は何個にしますか？」

「うん。紅白の二個でいいんじゃないか。毎年、そうしている。お

神酒と若水は俺が用意するよ」

食器棚から小さな酒のグラスを二個取り出し、一つに日本酒を注いだ。水道をしばらく流してから、もう一つに若水を注いだ。これらを神棚に供え、二礼二拍手し、口のなかで自分たちの無病息災を祈り、一礼してから、

「おい。お前も、お参りしろよ」と促した。

「はい」

女房は慌てて神棚の下へ来た。

潤三は、入稿期限の近い小説の推敲で悩みたくなって、今日だけは仕事をしないと決め、お屠蘇を飲んで心地良い気分浸っていた。

テレビでは全国各地の正月風景が放映されていた。観厭きたころ、

女房へ声をかけた。

「元旦も新聞、配達されるよな？ 新聞、来てないか？」

テーブルの上の食器を片付け終った女房は玄関ポストを覗きに行き、分厚い新聞の束を持って戻ってきた。

「はい。年賀状も届いてましたよ」

「ありがとう。年賀状からチェックするか」

潤三は自分宛と女房宛とを仕分けした。

向かいに座った女房は、年賀状を手を取っては送った相手からの返信の有無を確認していた。

「ああ。小森さんと斉藤さん。あれ、隆治伯父さんからもきている」

この人たちは女房が書くのを躊躇した末に出さなかった相手である。伯父については、遠く離れた秋田市に住んでおり、彼女の亡母の兄である。結婚後、毎年、年賀状のやり取りをしてきた伯父であるが、もう会うこともお世話になることもないだろうと思案した末に出さなかったのである。

「義母の兄だし、お前とは血が繋がっているのだから、母親がいなくても年賀状のやり取りくらいは続けろよ」

と、潤三はそうアドバイスをしたのであるが。

「予備の葉書がないので出せない」

女房のその声は悔いているようであった。

「年賀状なんて、コンビニで売っているよ。心配するな。何枚、必要なんだ」

「今のところ、三枚」

「じゃあ、後で初詣に行くから帰りに五枚くらい買ってくれば、足りるだろ。まだ全部届いてないし」

神社からの帰り道、近所のコンビニに寄った。店員に年賀状のあることを確認してから、菓子類のコナーにいる女房に伝え、潤三は雑誌を立ち読みした。しばらくすると、女房が後ろから笑顔で声をかけた。

「ねえねえ。年賀状、何枚、買えばよかったっけ」

潤三はムツと顔をしかめて言った。

「おい。お前の分が三枚だから、五枚もあれば間に合うって、家を出る前に、話しただろ？」

店を出て、さらに声をかけた。

「お前なあ、今年から何かをはじめろよ。毎日、決まったことしかしてないから、普段とちよつと違うことがあると対処できないんじゃないか。判断力も落ちてているし。何でもいいから新しいことをはじめろ。リズムを変えろ」

帰宅後、潤三はさらに急かした。

「今のうちに三人分の返信を書いて、投函してこい。明日まで延ばしたら、きつとまた忘れるぞ。お前のことだから」

女房はその気になったらしく、筆ペンを手にしてテーブルの上に置いてある雑誌と新聞をひっくり返していた。

「どこへ置いたかなあ？」

「ええっ？ 何を？」

「出すべき年賀状」

「お前、神社へ行く前に三枚だけ別にして手に持っていたぞ。俺宛の中に挟んだんじゃないのか？」

「うん。どこへ置いたかなあ？ ええっど？」

「しょうがないやつだなあ。今度は年賀状かよ。どれ」

潤三も探しはじめた。

すると、固定電話器の横に輪ゴムで綴じて置かれていた。

「おい。ここに置いてあるじゃないか。大き目の付箋を付けて、これは出す」とでも書いておかないから忘れるんだ。すっかりしろよ。毎日、同じリズムで時間を過ごしているから、物忘れをするんだ。脳ミ

ソを使え。リズムを変えろ」

「苛々させて、すみませんねえ」

女房は自嘲気味に謝った。

潤三はこのときとばかりに、愚痴とともれることを話しはじめた。

「謝るほどのことじゃない。人間の本性はリズムが壊れたときに現れるんだ。それは普段、大人しい人が大声を上げて怒ったり、笑ったりするときなどに見られる。観察する側からするとドラマの端緒だな」

「毎日、そんなことを考えているのですか」

女房の目は怖かった。

「やってみればおもしろいぞ。隠れていたものが見えるから」

そう言う潤三の声は弾んでいた。

「どうすればいいのですか？」

「たとえば、これまで俺は年賀状を早めに書いて郵便局が決めたクリスマスまでに投函してきた。お前もそうだろう。すべて元旦に届くように。われながら律儀だった」

「当たり前でしょ。お正月の挨拶なのだから元旦に届くのがいいのよ」

「そうだよな。でも、友人のなかには毎年、〈七草がゆ〉のころに返信を送ってくるヤツもいたよな。きつとこちらの年賀状が届いてから、三が日に返信を書いて投函しているんだろうよ」

「それでも送ってくるだけ、いいじゃありませんか」

と言う女房の言葉を耳に入れず、潤三は続けた。

「これを確かめようと思って、ある年、三十年來のある友人に年賀状を出さなかったんだ。いいやあ、今年はいいつのが届いてから、書くところか。ところが、その年、あいつからはこなかった。お前も知っているヤツだよ」

「偶然でしょ。相手は出したものと思い込んでいる場合もあるし」

「俺は、そうは思わなかった。あいつはこれまで俺の年賀状が届いてから、返信を書いてきていたのだな。その年は俺のが届かなかったものだから返信をよこさなかったんだ。くれた相手にだけ新年の挨拶をしていたんだ。あいつは。この推論は当たっていた。それじゃあ、と次の年も、こちらからは出さなかった」

その声は得意気だった。

「で、そのお友達からはきたの？」

「いいや。あいつからは一切こないよ。律儀なリズムを壊してみても、あいつの本性が見えた瞬間だったよ」

「いじわるしないで、こちらから出せばいいでしょ」

女房はまた怖い目をしていた。

「いじわるじゃないよ。これしきのことで不仲になる友人ではないので、気が咎めることもない。電話一本すれば、すぐにでも会える相手だし」

「そうかしら。不義理をされたと思われるわよ。きつと」

「いや。毎年、俺のが先に届いていたのだから、むこうが不義理さ。だからな。お前も自分で自分のリズムを壊してごらん。脳ミソが活性化して、物忘れの頻度が減るだろうから。何か新しいことをはじめるには、丁度いい、明日は書初めをする二日だ」

潤三は、まるで自分に言い聞かせるよう最後の言葉を強く言った。

それに逆らうよう、女房は口元に微笑を浮かべて、言い返してきた。

「じゃあ、おとうさんもミステリーばかり書かないで、私の物忘れをテーマにして、モチーフのはっきりした私小説風の作品を書くよう変身してみても、どうですか？」

その力強い声に潤三はギョツとして、一瞬背筋を伸ばした。(了)

## 6. 遺産額

やまだたろう

山田太郎は妻が他界したのち、家屋敷を売り払い、蔵書と最小限の家財道具をもって、アパートで独居生活をはじめた。家屋敷を処分したのは、固定資産税、冬季の除排雪費と暖房費、家屋の維持費などを節約すること、さらに自分の死後、子どもたちが引き継いでくれる保障もない、と考えたからである。子どもは長男の直哉、歳の離れた長女のスミ子と次男の隆を育てあげた。長男には賢一という息子が一人いる。太郎の唯一の孫である。スミ子と隆は社会人にはなっているが、まだ所帯を構えていない。

四十年にわたり納めた年金の給付も十分とはいえず、太郎は毎月、貯金を取り崩していた。道楽といえば、若いころから、読書が好きで、本や雑誌を買うことと、小説を書くための取材旅行くらいであった。蔵書は三千冊にもおよぶ。会社を退職する五年ほど前からは地元の同人誌に入会し、小説を投稿してきた。

そんな太郎も妻の七回忌がすぎたころには生きる気力の衰えを感じていた。新聞によれば、相続税制が改正され、基礎控除額が引き下げられたため、課税対象者数やその納税額が増えていた。これからの余命と生活費を勘案してみると、残る預貯金額は基礎控除額を上回るかもしれない。心情として、税金を払わせたくはない。

「孫は目に入れても痛くない」と言われるように、太郎にとっても賢一は可愛い存在であった。また隔世遺伝であろうか、賢一も幼いころから本を読み、文章を書くことが大好きな子どもであった。太郎も何かにつけて本を買い与えていた。小学生になっても賢一はスポーツや習い事にはさほど興味もなく、土曜日になると太郎のアパートへや

つてきては本を読んでいた。太郎は、そんな賢一を養子にして、法定相続人の数を増やし、節税することを長男夫婦に相談した。賢一が六歳のときであった。億単位の遺産を相続するわけでもないだろうから、夫婦はそこまでしなくても言い合ったが、どうせ養子にしたところで賢一の養育は自分たちがするわけだから、と太郎に折れることにした。また第二子が生まれる予定もあったので、固辞する理由もなかった。そのころ法的手続きに疎かった、スミ子と隆は親父と兄貴のあいだで了解しているのであれば、自分たちには反対する理由もない、という立場をとった。

太郎は、「自分が残す遺産は預貯金のみで、借金もないから、お前たちには面倒をかけなくてすむ。葬儀等も身内だけでこじんまりとやってくれ。トラブルこともないと思うが、そのうち自筆の遺言書を書いておくから」と伝えて、八年後に他界した。

初七日法要を終えた夜、スミ子が直哉に声をかけた。

「そういえば、お父さん、遺言書を書いておくから、って言ってたわね」「そうだな。明日、アパートへ行って搜してみるよ。借金はない、とは言ってたけど……」

直哉は静かな口調で返した。

隆は甥っ子の賢一と将棋を指していた。夕食時に飲んだビールに酔っ払い頭が働かず、中学二年生に負けたようだ。

「あくあ。そっかあ、そっかあ。この飛車だよな。悔しいなあ。もう一番やろう」

と大声をあげた。

その隆に向かって、直哉は、

「おい、隆。相続税って、高いのかな？」

と声をかけた。

駒を並べながら、隆は答えた。

「その前に、どだい、相続税を払うくらい遺産はあるのか？ たくさん本を買ったり、取材と称して、しょっちゅう色んな地方へ旅行にも出てただろ。あるんなら申告期限は死亡した日から十カ月以内だぞ。おれたち相続人は三カ月以内に遺産の引き継ぎ方を決めないといけない」

酔っ払っているわりには明確な回答であった。

すぐに、スミ子が訊いた。

「あら、詳しいのね。引き継ぎ方って？」

「俺は法学部で民法のゼミに所属していたからな。はっはっはっ」隆は笑ってから答えた。「財産も借金もすべて引き継ぐケース、相続する財産の範囲内で借金を引き継ぐケース、さらに財産と借金のすべてを引き継がないケースがあるんだ」

そう話してから隆は一手を打ったようだ。「パッシ」と駒が盤にあたる音がした。

「生きていたときに言ってたでしよ。借金は無いって。だから、すべてを引き継ぐケースでいいはずよ」

スミ子は盤上に頭を垂れている隆に向かって話した。

「遺言書を見ないと分からんって。とんでもないことが書かれている場合だってあるから。なあ、兄貴！」

隆は頭を垂れたまま、直哉に話をふった。

次の日、直哉はアパートへ行って、遺言書を捜した。難なく見つけた。机の引き出しのなかのアパートの賃貸契約書の上にあった。

「おお。親父らしい。見つけてください、っていう置きかただな」

自分一人で読むのはためらわれた。持って帰って、妹弟の前で開封

することにした。スマホで妹と弟へ日曜日の三時に、自宅へ来るようメールを送った。

日曜日、直哉は向き合ったテーブルの正面と横に座るスミ子と隆の前で遺言書と表記された封筒を開けた。

「これが親父の残した遺言書だ。必要なら、お前たちの分もコピーをとるけど？」

直哉はスミ子と隆の顔を交互に見て、そう訊いた。

「いらないわ」

「いらない」

二人は躊躇ちゅうちゅうすることなく、そう答えた。

「じゃあ、最初に俺が一応、確認するから」

直哉は顔の前に文面をもってきた。さらっと読んでから、「付言事項欄もあるんだな」

と言って、スミ子の前においた。

スミ子もさっと目を通し、

「遺言書って、こんなふうを書くんだ」

と開いたまま、隆へ「はい」と手渡した。

隆も黙読してから「なるほど」と呟いて、文面を直哉に返した。

直哉は手に持った文面を見ながら、話した。

「遺産は二つの銀行の預金だけだ」

「どれくらい残しているのだろう？」隆が訊いた。

「分からん。根が実直な人だったから、自然と残ったんだろうよ。貯金もほとんど本を買ったり、取材旅行のために使っていたんだろ。アパートには床が抜けそうなくらい本や資料を積んである。家のローンも、スミ子、お前が短大二年のときに一括して返済したって言っただろ？」

「そうそう。あのとき、亡母<sup>おかあ</sup>さんは「肩の荷が下りた、って喜んでたわ」と言つて、スミ子は文面を渡してくれるよう右手を直哉へ差し出した。

「しっかりと筆跡ね。これを見るだけでも人となりが分かるよね」父親を懐かしむように文面を見ていた。が、相続人欄を見て、ふと思ひ出したように訊いてきた。

「賢ちゃんを養子にすることは聞いていたし、文句はないけど、そもそも血の繋がった孫を養子にできるの?」

「スミ子。その手続きをしたのは八年前だ。法的に認められているから、心配ないはずだ」

直哉は強い口調で言い返した。

「いえ。私が知りたいのは、孫は親子じゃないでしょ。養子にしたからって本当の親子関係は築けないわよね。こんなことが法律で許されるわけ?」

「ああ、その点なら今回の最高裁判決で明らかにされたよ」

隆がきつぱりと答えた。

「どういうこと?」

「新聞に出てただろ? 節税を目的とする養子縁組であっても、親子関係を築く意思がなかったとうかがわせる事情はない。つまり縁組は有効だ、認めます、っていう判決が出たんだ」

「そうなの。最高裁判決であれば確かよね」

スミ子は、もうこれ以上は尋ねません、というふうに答えた。

「それよりも預金通帳と印鑑を捜さないと、他の書類を要求されてスムーズに相続できない」

隆は強い口調で言った。

その声に触発され、直哉は長男らしくリーダーシップを発揮した。

「よし、手分けしてやろう! 俺とスミ子は明日、アパートへ捜しに行く。隆! お前は相続税の計算法をすぐに調べる。いいか、法定相続人は四人だ。アパートへも来て、手伝ってくれよ」

「オッケー! でも、ちょっと確認させてくれ。兄弟弟の間で疑うわけじゃあないけど、親父が生きていたときに金を贈与された、ってことはないよな? 生前贈与があると、分割の計算が違ってくるから」直哉とスミ子は交互にきつぱりと答えた。

「もらってない」

「もらってません」

「分かった。当然、俺も、もらってない。ルールが改正されたはずだから、ネットで調べてみるよ」

隆も安心したふうに答えた。

「家族の集合写真を飾った額縁の裏、下駄箱、机の引き出し、押入れ、洋服ダンス、流し台の下、冷蔵庫、食器棚、米櫃<sup>こめびつ</sup>。年寄りが隠しそうな所にはどこにもない。あゝあゝ」

直哉は捜し疲れ、ちゃぶ台の前で胡坐<sup>あぐら</sup>をかいた。

するとスミ子がしたり顔で助言した。

「畳の下じゃないかな?」

「ええ?? そんな所に隠すかよ?」ひと呼吸おいてから、直哉は、

「そうだな。年寄りだから……。上げてみるか」と言つて、立ちあがり、和室の六枚の畳を上げてみた。隆も手伝った。

しかし、なかった。

「まさか貸し金庫に預けたとか?」

直哉はぶつぶつ言いながら、またちゃぶ台に戻り胡坐をかいた。

「そんな知恵はないだろ」

隆はその横で足を伸ばし、孫の手でしきりに背中を掻きはじめた。

その姿を見て、スミ子は、

「隆！へばってないで、あんたも、もっと捜しなさいよ！」

と、発破をかけて、自分は腰を下ろした。

「はい、はい」

隆は大儀そうに立ちあがり、本棚の前に立ち、顔を上下させて背文字を眺めながら、

「それにしても、よくこんなに読めるよなあ」

と、感心したふうに言った。

数冊抜き出し、ペラペラと捲っては、

「たくさんアンダーラインや書き込みがしてあるから、古本屋じゃあ引き取ってくれない。資産価値はないな」

と、独り言を口にした。

「どうする？この本。資源回収に出す？」

スミ子も本棚を見上げて言った。

「そうだな。どうするか？俺は読まないし」直哉も本棚を見上げて、「それよりも通帳を捜さなきゃ？」と、困惑した声で言った。

本と本の間には太郎と賢一のツーショット写真が飾られていた。隆はその写真立ての裏側の留め金を外し、そこには何もないことを確認してから、また留め金を掛け直しながら言った。

「年寄りだから意外とすぐに分かるところに置いてあるもんだろ。本人が忘れるような所には置いてないって。きっと。でも、この本、どうするの？俺はいらない。このアパートへは賢一がよく出入りしてたんだろ。あいつも親父に似て、本を読んだり、文章を書くのが好きだから。まったくのお祖父ちゃん子だ。養子にしたのも領<sup>うけ</sup>ける」

その声に触発された直哉は、

「そうか。賢一にも捜させよう」

と、スマホで事情を知らせた。

賢一からはあつけない答えが返ってきた。

「ああ。それなら解かるよ」

「じゃあ、ちょっと来てくれ？」

五分ほどして、賢一はアパートへやって来た。

そして、「ここだよ」と、本棚からスクラップ・ブックを抜き出した。

その空いた所にはしわくちゃんになった定型外の茶封筒があり、なかには二冊の預金通帳、年金手帳と健康保険証が入っていた。

「おお。ありがとう」

直哉は通帳を開いて、金額を見た。

「ううん？」声を漏らし、すぐに「キャッシュカードも？」と声をかけて、もう一度、金額を確認した。

「カードはねえ。えーと、たしかあ」

賢一は離れた棚の全集を抜き出し、その透き間からまた茶封筒を出した。すかさず、スミ子が印鑑の在り処を訊いた。

「印鑑は、印鑑は、えーとねーえ。台所の収納庫にある海苔を入れるタッパの底だよ」

スミ子は収納庫を開けながら、亡母もこうしていたことを思い出した。

「あったわ」

「よく、教えられていたなあ。お前」

直哉はニコニコ笑いながら息子に声をかけた。

「だって、いつも土曜日の夜は泊まって、本を読ませてもらっていたもの」

「そっかあ。お父さんたちがこの部屋へ入るのは引越しを手伝って以来なんだ」

すると、賢一はこれだけは伝えなければというふうに話した。

「お父さん。お祖父ちゃん、自分が死んだら、ここにある本、ぜんぶ僕にあげる、って言ってたけど。いいかな？」

「ああ。さっきそんな話をしていんだ。叔父さんも叔母さんも読まないから、お前の好きにしろ」

「ありがとう。それから、お祖父ちゃんねえ、同人誌に書いた小説をみんなに読んでほしい、って言ってたよ」

「おーお。同人誌な。下手の横好きとかで、盛んに書いている、ってことは聞いていた」

「ここにあるよ。これが最新号だよ」

直哉は受け取って目次を開いた。

「名前が出てないじゃないか？」

「ペンネームだよ」

「親父はペンネームを持っていたのか？」

直哉はペラペラと捲りながら問い返した。

「ええっ？ お父さん、知らなかったの？」

「うん。すまん」

「机の上にあるPCにもまだ活字にしていない小説が入力されているよ。確か、『言葉』っていうホルダーだから」

賢一はそう教えた。

直哉は遺言書の付言事項欄を思い出した。

「そうか。うん。ちょっと待てよ」

「スミ子！ 遺言書を持って来てくれ！」

「はい。何？ どうかした？」

直哉は丁寧に広げて、目を凝らして読み上げた。

「『PC内の原稿と同人誌に書いた小説を読んでみてください』『みんな仲良く、暮らしなさい』」

その声を聞いて、隆は二十数冊の同人誌を本棚から抜き出して、ちやぶ台の横に積んだ。そして賢一に訊いた。

「賢ちゃん。小説を読むことのほかに、お祖父ちゃんから何か聞かされたことはないかい？」

「うん。お祖父ちゃん、お酒を飲みながら、残っている原稿を活字にしてくれると嬉しい、って、よく言ってたよ。私小説ふうのものが多くので、照れくさい、って、言って、読ませてくれなかったけど」

と、賢一は答えた。

「し、しょう、せつ、って、なんだ」

直哉はスミ子に訊いた。

「あれ。三浦哲郎とか上林暁とかいう作家がいたでしょ。自分を主語にして身の周りにあることをテーマにして書いた小説よ」

スミ子は短大の日本文学科を卒業していた。

「実話ってことか？」 隆が口をはさんだ。

「多少の脚色はあるけどね」

「じゃあ、俺たちへのメッセージみたいなことも書いてあるかもな」

隆は確かめるような目をしてスミ子と直哉の顔を見た。

直哉は別の同人誌を手に取り、ペラペラと捲っては親父の小説を捜しはじめた。それに気づいた賢一が声をかけた。

「お父さん。お祖父ちゃんのペンネームは畦道一歩、二歩、……だよ」

「あ、ぜ、み、ち。おおうあった、あったあ。これか」

「お父さんたちの実名が出ている小説もあるよ」

賢一が教えると直哉と隆は声をそろえて、

「読んだのか？」

スミ子もつられて、

「読んだの？」

と訊いてきた。

「うん。読んだよ。童話ふうのものはね」

賢一は頬<sup>ほ</sup>をゆるめて答えた。

しばらく会話はとぎれた。賢一以外は同人誌を捲り畦道というペン

ネームを捜していた。ようやく、直哉が切り出した。

「よし。スミ子。隆。この同人誌とPC内の原稿を読むぞ。メッセー

ジを探そう」

直哉はPCの蓋を開けた。スリープ状態になっていたようで、ウィ  
ーン、ウィーンと音を立てて、起動した。コードをコンセントに差し  
込み、マウスをクリックすると画面が開いた。

「おいおい。ウインドウズXPかよ。産業遺産だな」

と、呆れたような声を漏らした。

トップページにある言葉というフォルダーをクリックした。小説名  
の付いたファイルがナンバリングされていた。それらしきファイルを  
開いては速読した。どの小説も原稿用紙三十枚ほどの短篇である。い  
ずれもすらすらと読みやすい文章と内容であった。

読書の時間が三時間をすぎようとしていたとき、隆は掌を頭上で組  
んで「あゝあ」と大きく伸びをしてから、「活字を真剣に読むのも受  
験以来だな。はっはっはっ」と笑った。それにたづねられて、スミ子も「あ  
ゝあ」と開けた大口に手をあてた。机の脚下で、賢一は『野鴨』（庄  
野潤三）を読んでいた。

直哉はPCの画面から顔を上げて、賢一に確認した。

「この言葉内にある小説は、まだ活字にしていないのだな？」

「うん。活字にしたものは別のフォルダー「済文学」に入れていたよ  
うだよ」

それから直哉はスミ子と隆に確認をした。

「どうだ。お前たち、見つけたか？」

「わたしたちを主人公にした『つるし柿』『形見』というタイトルの  
ものはあるけど、伝えたいことを書き残したものはないよね」

スミ子が答えた。

「俺も『本を読むということ』を見つけたけど、右に同じです」

隆はもう厭きた、というふうに答えた。

「こつちにはそれらしきものがあつたぞ。『お庵からの美しい眺め』  
というタイトルだ。文末にある脱稿年月日からすると、還暦をすぎた  
ころに書いたようだな。該当箇所を読んでみるから」  
と、直哉はPCの画面に顔を近づけた。

「おい、千次<sup>せんじ</sup>。お父さんが死んだら、骨揚げのとき、骨片を小さな  
箱か瓶に入れて、ここへ持って来て、この景色を眺めながら、パラパ  
ラと空中へ撒いてくれないか。ほんの少しでいいから」

「千次は背中からデイベッグを足元へ下ろし、その内ポケットから小  
さな箱を取り出した。蓋を開け、中身を右手の人差指と親指でつまみ、  
顔の前へ持つてきて声をかけた。

「お父さん。郷里<sup>いなか</sup>へ連れて帰つて来てあげたからね。山や川、生まれ  
育った実家の跡も見えるでしょ。これでいいかい？」

それから右手をまっすぐ前へ伸ばして、パラパラと落とした。微かに  
吹き上げてくる風に乗って、骨片はときおり、ピカッピカッと陽に反  
射をしながら、さえぎるもののない眩しい空へ溶け込んでいった。』

読み終えて、直哉は「以上だ」と、声を上げて妹と弟の方へ顔を向

けた。

「じゃあ、あれかあ。徳島の本家の墓所のある丘から散骨してくれ、ということか？」

隆が確認するよう声を出した。

「そうらしいな。骨壺は、四十九日までは家にあるけど……。散骨かあ。いいのかあ？ どうかなあ？」

直哉は不安そうな声音で返した。

「でも、その小説だと千次っていう息子が実際に散骨をしたのよね」

スミ子が口をはさんだ。

すると、隆が直哉を促した。

「墓に入れる前に少しか、取っておいて、徳島へ持って行くかい？ 少しかなら撒いても問題ないだろ」

それから、沈黙の時間が流れた。大人たちが頭をかかえている空気に耐えかねて、賢一が言った。

「文章にあるように、ほんの少しであれば撒いてあげればいいんじゃない。そのときは、僕もお祖父ちゃんの郷里へついでに行きたい」

「そう言ってもなあ。散骨は？ 問題が？」

直哉はまだ不安げであった。

「兄貴。親父の最後の頼みだぞ。希望を叶えてやろうや。賢一が言うように、ほんの少しの骨片じゃないか」

隆は直哉に決断するよう求めた。

「スミ子。お前は思う？」

直哉は訊いた。

「私は隆や賢ちゃんに賛成よ」

「そっかあ。じゃあ、ほんの少しだけ散骨してあげよう。決定！」

直哉はみんなの顔を順繰りに見て言った。どの顔にも笑みが浮かんだ。

だ。

それから、直哉は静かな声で付け加えた。

「散骨へ行くときの旅費は賢一の相続分を使おう」

妹と弟は、思わず笑みをこぼした。

「もう一つ、残った原稿を活字にしてほしい、って、これはどうする？」

スミ子が心配そうに言った。

頭髪を掻きあげながら直哉が訊いた。

「よう分からん。うーん、賢一。どう思う？」

「お祖父ちゃんの貯金が残っているでしょ」

「うん。残っている」

「それで自費出版する、ってこともありだよ」

賢一は自信あり気な声で提案した。

「自費出版だって！ そりゃあ……金が……」

隆が素っ頓狂な声をあげた。

「そう。レイアウトを自分たちですれば、印刷代もそんなにはかからないよ」

「そうかあ？」

直哉は訝るような声を出した。

「だって、同人誌でさえ、会員がレイアウトをしてから入稿しているそうだよ。PCを使えば簡単にできるじゃない」

「同人誌の印刷会社に頼めば、製本も安くしてくれるかもね。売るわけじゃないし」

スミ子が加勢した。

「それじゃあ。その印刷製本費も賢一の相続分を使おう。お前たちはこれから所帯をもつのに、金もかかるだろうから」

直哉は微笑みながら妹と弟の顔を見て言った。

「……」

「……」

二人は申しわけない、という表情をした。

直哉は「いいんだ。心配するな」と、きっぱり言い切った。

そして、話をまとめた。

「まず原稿をプリントアウトして、みんなで読んで、最低限の誤字脱字だけでも修正しようや」

そう決まると、すぐに隆は賢一の顔を見て確認した。

「当然、お前も手伝うよな？」

「もちろん」

賢一は元氣よく答えた。

「ところで、兄貴よお。親父はいくら貯金を残しているんだ？」

隆が訊いた。

「ああ……」

直哉は無言のまま二冊の預金通帳を開けて見せた。

「おお？ ええっ？ これだけか？ これじゃあ、節税対策もいらん。頭割りすれば、高卒一年目の年収にも及ばん。相続税は払わなくてもいい」

最後の言葉だけを聞いて、スミ子はニコッと笑った。直哉は気まずそうにニヤニヤと顔をゆがめた。(了)

注。課税遺産総額＝課税価格の合計額－基礎控除額「＝三千万円＋(六百万円)×法定相続人の数」。二〇二三年八月現在。

参考文献。

『朝日新聞』「Re ライフ on Saturday わが家の相続会議 3・55・59」  
二〇二一年七月十七日、二〇二二年九月三日・十月一日。

『朝日新聞』二〇一五年三月二十六日、二〇一六年十月二十日・十二月十六日、二〇一七年二月一日。

裁判所、裁判例情報「養子縁組無効確認請求事件、平成二十九年一月三十一日 最高裁第三小法廷判決」ホームページより。

## 7. プラセボ社

―朝八時三十分。事務所にて。

「ブルン、ブルン……」固定電話が鳴る。

社長は受話器を取り、しばらく話してから笑みを浮かべ、社員に指示を出した。

「H君！ W病院の金尾<sup>かねお</sup>さんが危篤です。すぐに行ってください。後は、よろしく頼みますよ」

「はい。承知しました」

Hは同僚のSと病院へと急行した。

病室へ入る前にHは茶封筒から書類を取り出し、担当医に差し出した。医者は受け取ると、入念に目を通してから、「確かに、金尾<sup>かねお</sup>貯<sup>ため</sup>夫<sup>お</sup>さんの遺言執行契約書です」と言って押印し、「本日は、ご苦勞様です」と頭を下げた。

―病室にて。

「伯父さん！ 伯父さん！ 死んじや嫌だよ。あゝあ、あゝあゝあ。伯父さん！ あゝあ。目を開けてよー。あゝあゝ」

Hは金尾の最期を看取ることができなかった。涙でクシャクシャになった顔をハンカチで拭いながら言った。

「じゃ、Sさん。お願いします」

「はい。承知しました」

Sは手際よく遺体を棺に納め葬儀場へと運び、常設の祭壇に安置した。

読経のテープ音が響き渡るなかを会葬者三十数名の焼香が終わる。

Hが挨拶に立った。何度もハンカチで目元を押さえ、深々と一礼してからゆっくりと口を開いた。

「本日は、ご多忙にもかかわらず、伯父の葬儀にご参列いただきまして、誠にありがとうございました。あ、あの。クシユクシユ」

言葉を詰まらせ五秒ほど間が開いた。

「伯父はこの地に生まれ育ち、大学を卒業すると、父親が経営する会社に入社して以来、六十年間に渡り、社長・会長として社員とその家族と社会のために働いて参りました。終生、独身で、すでに血縁者はおらず、かつ独居老人ではありましたが、金だけは腐るほど持つておりました。クシユクシユ。しかし取る歳には勝てず、数年前より入院を繰り返しておりました。必ずや、元気になってくれるだろうという私の希望もむなしく、今朝八時五十八分に帰らぬ人となってしまいました。クシユクシユ。残念でなりません。クシユクシユ。生前、伯父は遺言を残しておりまして、このような葬儀をすることとなりました。最後に、遺言の一部をご紹介させていただきます」

Hは上着の内ポケットから便箋を取り出し力強く読み上げた。

『……長年にわたり、社員、友人や知人たちからいただいたご厚情に深く感謝いたします。この葬儀費用の他に残る莫大な遺産は貧困家庭の子供たちの教育資金として使ってください。本日は、ありがとうございます。金尾貯夫』

「クシユクシユ」Hはまたハンカチで目元を拭った。

「それではこれより出棺となります」間髪を容れず、Sが伝えた。

「ウッウッウッ」どこからともなく若い女性のか細いすすり泣きが洩れ聞こえてきた。

「ブー」霊柩車は長〜いクラクションを鳴らすと、火葬場へと向った。

——火葬場にて。

「故人のお姿を目にされるのはこれが最後です。今一度、お別れのご挨拶をお願いします」

会葬者たちは隠坊おんぼうに誘導されて、棺に近づき、涙声で最後の別れの言葉をかけます。

H 「伯父さん！ ありがとうございます。天国で楽しく暮してね。クシユクシユ」

元社員 「社長！ お世話になりました。ありがとうございます。感謝してます。ウ〜ウ〜」

スナックのママ 「ウッウッ。貯さん！ 寂しいわ〜。ウッウッ」  
ゴルフ仲間 「金尾！ ウ〜ウッウッ。あの世でもホールインワンを狙えよ。じゃあな〜」

棺は隠坊の手によって炉の中へ押し入れられ、扉が閉められた。

——一時間後。アナウンスが流れた。

「金尾家のご遺族の方々へ申し上げます。お骨上げの時間となります」

た。お集まりください」

焼きあがった骨を見て、会葬者たちの中から「おお」というため息が洩れた。

隠坊は小さな骨壺を用意すると、「ここが脚です。ここが腰と胸、これが咽喉仏ですね。ここが頭です」と、一応の説明を終えてから「では、皆様、脚のお骨から順番にこの壺へ入れてください」と促した。

その後、葬儀場での法要を終え、故人の遺言により、遺骨は市の合同墓へ納骨された。この一連の儀式は四時間ほどで終了した。

―夕方五時。事務所にて。

「皆さん、集まってください。今日の手当てを支給します」

社長は三十数名の派遣社員とアルバイトたちに声をかけた。

「主役を務めたHさんには、特別手当として三万円。はい」

「よっしゃ！」Hは封筒を受け取り、中身を確認すると、ヘラヘラと笑った。

「ドライバーと隠坊役のSさんは二万円。会葬者役には各自一万円を支給します」社長は封筒をかざした。

「やったぜ！」Sは拳を突き上げ、ガッツポーズをした。

「わーい」女性は思わず手をたたいて小躍りした。

「ブルン、ブルン……」固定電話が鳴った。

「ああ、ちょっと待って」社長は受話器を取った。

W病院からであった。社長は顔を社員に向けてニッコと笑ってから「はい。毎度、お世話になっています。こちらはブラセボ社です、と明るく答えた。(了)」

注。ブラセボ(偽)とは、「わたしが喜ばせる」という意味のラテン語である。十四世紀には葬式で死者のために泣き、涙を流す役として雇われた「泣き屋」のことを、こう呼んだそう。日本語の幫間にあたるかもしれない。

付記。少子高齢社会では、こうした擬似家族による弔い方も必然かもしれない。

参考文献。

ダン・アリエリー(熊谷淳子訳)(二〇一三)『予想どおりに不合理』早川書房。